

清 脩

会報清脩^{せいしゅう} 第44号 令和6年9月12日 飯能市退職校長会

地域活動とコミュニティづくり

会長 小見山 実

いわゆる「コロナ明け」となった昨年度は、地域研修会や相互研修会、懇親会等、予定した事業を全て計画どおり実施することができました。

本会の活動に対する会員の皆様方のご理解、ご協力に改めて感謝いたします。

ところで、それぞれの地域におきましてコロナ禍で中断していた行事や様々なイベント等が一気に再開されてきており、コロナ前の日常が戻りつつあると実感している方が多いかと思えます。

会員の皆様方の中には地域でいろいろな役を担い、地域活動に忙しい方もおられるかと思えます。

私も退職後、自治会や地域のボランティアの会、地域福祉の会等の役が次々と回ってきて、頼まれるままに活動してきました。なかでも、地区スポーツ協会の会長を平成26（2014）年から現在まで10年間務めてきました。（体育協会は令和2年から「スポーツ協会」に名称変更しています。）また、飯能市スポーツ協会の理事・副会長も兼務しており、飯能新緑ツアーマーチや奥むさし駅伝大会等のイベントにも関わっています。

飯能市内には、加治・精明・南

高麗・東吾野・吾野・原市場・第二地区・飯能中央・名栗の九つの地区スポーツ協会があります。

それぞれの協会では、運動会をはじめウォーキングやグラウンドゴルフ、ソフトボール、そして最近では、ペタンクやフィンランドのスポーツのモルック等々、地域の特性をいかしたスポーツイベントを実施して、地域住民の健康の保持増進と交流・親睦を図っています。

最近の地区の運動会は選手集めが大きな課題となっており、所によつては、徒競走的な競技種目はなくして、誰でもが気軽に参加できるような種目を中心に実施している地区もあります。

私の南高麗スポーツ協会では、地区の運動会は、学校と合同で行っています。少子高齢化と人口減少により、運動会が地区、学校共に少し寂しくなっていました。そこで小学校とは二十数年前から、そして、中学校とも二年前から一緒に行うようになりました。

運動会当日は、住民同士の交流はもとより、地域の人たちが子ども達の様子や学校を知るための良い機会になっており、地域の一体感を一層強く感じる時間にもなっ

ています。

しかしながら、コロナ禍の数年間は、地域のイベントは中止となり、人の交流もなく、地域コミュニティ崩壊の危機感がありました。

例えば災害等のいざという時には、住民同士の助け合い、支え合いが何より大切です。住民同士が挨拶を交わし、地域の行事に参加して知り合いになることにより、お互いのつながりもできます。

スポーツ等のイベントを通じて自分も同じ地域の住人であると感じることにより、お互いの絆が強まり、そのことが住みやすいコミュニティづくりにつながると信じて日々活動しています。

会員の皆様方も機会がありましたら、自らの健康づくりや地域の人との交流のためにも、それぞれの地区のスポーツイベントに参加してはいかがでしょう。

ウォーキング等無理せずに行うことからで良いかと思えます。地域交流を通してこれまで気づかなかつた新しい発見があるかも知れません。

賀 寿 顕 彰 者

叙 勲

叙勲おめでとうございます
永年に渡る教育活動への功績
永年に渡る教育活動の功績に對して、本年度は三名の方が叙勲の榮に浴されました。

大 高 秀 夫 様 (飯能)

瑞宝双光章

令和六年一月一日付

飯能市教育委員会 扱

平成八年三月、飯能市立加治小学校長を退職、

本会に入会して活動をしていただきました。

市 川 義 男 様 (原市場)

瑞宝双光章

令和六年一月一日付

飯能市教育委員会 扱

平成八年三月、飯能市立精明小学校長を退職、

本会に入会して活動をしていただきました。

澤 田 清 志 様 (柳町)

瑞宝双光章

令和六年四月二十九日付

飯能市教育委員会 扱

平成二十五年三月、飯能市立飯能第一小学校長を退職、その後飯能市教育委員会教育長を経て、

本会に入会して活動をしていただきました。

高 齢 者 叙 勲 の 榮 に 浴 して

市 川 義 男

令和六年二月二十七日、晴の日市教育委員会から中村教育長様と叙勲事務担当者二人の方に拙宅へご足労頂いて、教育長様から叙勲「瑞宝双光章」を賜りました。

教育長様の明瞭で心こもる辞を拝聴後、職員の方に記念の撮影をお願いして「式」を終えました。

これより先、昨春秋には退公連飯能支部の米寿祝賀会があり、亦市退職校長会長小見山先生からも埼玉県を代表して心温まる寿詞と記念品を頂戴しました。

改めて心よりお礼申し上げます。さて、八十と八を数える年齢となり、今まで教育公務員としても様々な経験・体験をしてきました。が、バイク転倒の怪我以外大した病気もせず、大好きな児童達の教育という仕事に邁進できたのは日々、家族の支援・協力があってこそ、と感謝しております。

また、四十年余に及ぶ勤務地は飯能市と人間、坂戸、日高の四市となりますが、どの地どの学校にも尊敬する人達の姿、教育の心と愛情の辞、哲学がありました。

「学校はこども達のために在る」「教師は授業で勝負する」等々。身に沁みたる辞が私の宝物です。

感 謝 申 し 上 げ ます

澤 田 清 志

令和六年度春の叙勲に際し、はからずも受章の榮に浴することができ、誠に有り難く厚く御礼申し上げます。

お陰様をもちまして、去る五月十四日、妻と共にホテルニューオータニにて勲記・勲章の伝達を受け、引き続き皇居に参内して天皇陛下に拝謁の榮を賜り感激の極みでございました。

私の教職のスタートは、加治東小学校で日高市、人間市、西部教育事務所そしてまた飯能市とお世話になりました。この間、校長職は人間・仏子小学校、飯能・飯能第一小学校の二校で七年間、その後三年半、飯能市教育委員会教育長を勤めさせていただきました。

この間に多くの皆様方よりいただきましてご指導ご厚情の賜と心より感謝申し上げます。

今後この榮譽に恥じることがないよう、また愛する飯能の一助となるよう一層精進をする所存でおります。何とぞ従前と変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

傘 寿

白 き 長 ぎ あ ご 七 げ

中 藤 栄 岳

「ぼう、おみやだよ」
祖父はそう言うと、長い顎ヒゲを一本、引き抜き私に渡した。それは真つ白く輝いていた。
私はいつもの宝箱にそろと入れると、後は覚えていない。

祖父は、一週間後亡くなった。猫が死んだ。野良猫だったが、朝になると何処からともなく現れ「にやあ」と鳴く。眼くそが気になるらしく、さかんに前足で顔を洗う。チリ紙で拭き取ってやるとまた「ニヤア」と鳴く。その時、「いつもの時間になったのニヤ」と私が言うのと満足そうに帰っていく。ある朝突然庭で倒れていた。お葬式をしなくては、と箱に入れ

花を摘み、ふと見ると眼くそが見えた。何時ものように「最後の時になったのニヤ」と小声で呟くと何と、大きな眼が「グワツ」と開いた。そしてその眼の中に真つ青な深い湖が見えた。

私も何の役にも立たない人生を八十年も無為に過ごしてきてしまった。人も猫も最後のときには何かを残す。何を残したらいいだろう。そんなつまらないことを考えている今日この頃だ。要するに「ひま」なんだよね。

傘寿を迎え、夢は世界一周

小久保 則之

昨年の暮れ、四十五年も前の教え子から世話になった先生と飲みながら昔話したいと電話があった、快諾した。話の内容は後にして。

人間五十年、下天のうちを比べれば夢幻の如くなり。これは出陣の前に舞った信長だ。私は今年傘寿（八十歳）を迎え、飯能の退職校長会からお祝いを頂いた。

話は変わるが私の趣味の一つが海外旅行だ。数えてみたら二十八ヶ国行っている。まだ世界一周もしてみたい。だがコロナ禍と生憎の円安でここ暫く行けていない。そのうえパスポートも切れてしまった。半ば諦めスーツケースも処分した。だがまさかの希望が湧いてきた。それが冒頭の教え子との呑み会だ。彼は今大手葬儀会社の会長だという。ヤンチャだった彼は世話になった先生の葬儀は俺が仕切ると云ってくれたが、家族葬で海に散骨するつもりだからと断った。それなら散骨だけでも俺がやると言うので任せることにした。諦めていた海外旅行、海流に乗って世界一周、寒くないか、溺れないか、サメは来ないか、不安はあるがこんな形の世界旅行、実現できるか今考えるだけで楽しみだ。

古希

高齡・楽齡・健齡……

大澤 修

日本の高齡化率は、今年三割を超えてくると言われています。

そんな中、古希を迎えました。まだまだ自分としては若いと思っていました。加齡には勝てませんが、でも年齡を重ね高齡になつていくことへの考え方・捉え方はいくつかあるように思います。

一つめは「楽齡」つまり楽しんで年齡を重ねていくことです。そのためには、たくさん仲間をもちお互いに年を取っていくことを楽しむことである。昔話や仲間の武勇伝などの「おしゃべり」は最も楽しいひとときでありボケ防止にもなることでしょう。

今年、久しぶりに高校の古希同窓会があります。当時の仲間の顔などが分からなくてもその変化を楽しんできたいです。

二つめは「健齡」つまり健康であることです。いつまで健康で自分のことが自分で出来るかです。ストレスを溜めないで心身ともにリフレッシュしていきたいです。その他にも旅齡・酒齡など様々な捉え方があると思います。

古希は人生の通過点とし人と人との交流を大切にして、古希後の人生を楽しく歩んでいきたい。

人生、下り坂最高

高野 淳一

六十五才で退職してから五年が経ちました。旅行や園芸などの趣味に時間を費やす毎日です。

数年前より、知人などから依頼され不定期に会合等に参加して社会と係っています。その一つが夜に中学生に勉強を教える教室です。市が運営し、先生は中・高校を退職した教員で、中学生が二十人近く学びに来ます。ほぼ一対一の対応なので、「わかった」「できた」の気持ちを数多く味わいたいと思っています。

また、最近ではテレビを見るようになりました。その中の一つが「にっぽん縦断こころ旅」です。手紙に書かれた思い出の場所を、今は七十才台半ばになった男優が訪ねる、十年以上続く長寿番組です。

男優は上り坂を苦しそうに進みますが、下り坂はペダルをあまり漕がなくても風を切つて気持ちよさそうに進みます。その時、「下り坂、最高！」「人生、下り坂最高！」と叫びました。

できない事を数えるのではなく、プラス思考で前向きに生きていこうと考えて古希を迎えました。

二拠点生活7年目

中川 佳和

母が脳梗塞で倒れた平成三十年十二月十七日から始まった富山県と埼玉県の二拠点生活が七年目に突入した。この間、父は令和二年一月二十三日に亡くなった。母は令和二年から特養でお世話になっている。食が細く心配な点はあるが意思表示がしっかりできるので安心である。北陸地方は季節の名産品が沢山あり、毎年の楽しみとなつている。冬の寒ブリ、甘エビ、マダラ、ばい貝。春のホタルイカは絶品だ。今年もホタルイカが豊漁で沢山食べられた。また春は山菜のワラビやタケノコが楽しめる。晩秋には干し柿が出回り、上品な甘さが堪能できる。私は一昨年と昨年の2回、近所に住む叔父と一緒に干し柿づくりを行った。一昨年は千三百個。昨年は七百個作った。皮むきと糸結びが大変だった。また、寒さの厳しい中で練炭を焚いて干し柿を乾燥する作業も骨が折れる。一つ三百円の干し柿には沢山の手間がかかっているのである。今年は二十年ぶりに砺波のチューリップを観てきた。三百品種、三百万株の迫力に大いに感動した。花びらに改良を加えた品種がとくにきれいだった。

和みの御茶

小島 明

文月。茶道をカルチャースクールで教え始めてから5年を経た。2週間前から考えていた道具組の紐を解く。今日は、源氏香の須磨と明石の透かし彫が施された棚と夕顔蒔絵の棗を使う。茶杓の銘は「宇治十帖」より浮舟。床の間に軸を掛け、花を入れ、お茶とお菓子を用意して、釜を懸ける。生徒さんが入室するまでの暫の時間、和みの御茶とすべく、閑坐する。「和」とは、千利休が示した、四規『和敬静寂』の最初の一字である。和むということの真意を考えれば、己の未熟さ故に、十分に為されているか、疑問が残る。「茶の湯とは、耳に伝えて、目に伝え、心に伝えて、一筆も無し」と言われる。畳目の道具位置を問ひ、テキストや解説書の無い、相伝や奥伝の稽古ともなると、なかなか難しい。「教えてあげるから、こうしなさい。」では、和みの場とは、ならない。相手を理解し、お互いを尊重することにより、和みの場となり、滋味深い、和みの一盃となる。家元は「世の中に和みの場をつくっていくことが、茶の湯の本意です。」と常々、仰る。和みの御茶、精進したい。

名栗川の追憶

山下 忠夫

名栗川と天覧山は、小学校の校歌にも歌われ、飯能に古くから住む者には思い入れの深い場所です。往時の名栗川は、ダムも護岸のコンクリート壁もなく、豊かで清冽な流れが所々に深い淵を作り、滔々と流れていました。また、飯能河原には、木柵で水を堰き止めたボート場が作られており、ボートが行き交う堰上では、小学校の水泳授業も行われました。子どもの頃の私にとって、名栗川はこの上ない遊び場であり、日々の生活の中心でもありました。私の夏休みの一日は、早朝に起きて水着を着込み、釣り道具一式を持ち、自転車に乗って飯能河原に出掛けることから始まります。朝霧に煙る河原に降り、若鮎の放つスイカの匂いを感じながら雑魚釣りに興じ、かしましい蟬の声の中、淵に潜り、岩場から飛び込み、また、釣りに戻るといった具合で、かわず蛙の声が河原に響く頃まで、それこそ、飲食を忘れて一日を過ごしていました。現在の名栗川の様相は、昔とは全く異なってしまうようですが、今もなお、伸び伸びと過ごした少年の頃の大切な思い出の場所です。

新会員のごとば

よろしくお願ひします

土屋 孝夫

この度ご縁があつて皆様方のお仲間入りをさせていただくことになりました。一体何者だ？という方がほとんどだと存じますので、自己紹介をさせていただきます。私は昭和六十一年度から狭山・山中で社会科教員として教員生活をスタートさせ、平成二十八年まで三十一年間狭山市で勤務してました。そんな私の飯能との縁は、平成二十九年度から教頭として勤務した原市場中での三年間だけですが、しかし、この三年間は管理職としてのいろはを覚えていたのだが大変貴重な日々となりました。また、原市場の森の手入れを地元のひとともにするたびに、定年までここで勤めあげたいとさえ考えていましたが、その後狭山に校長として戻り、今年度は狭山の西中で特例任用校長として勤務しています。生まれも育ちも狭山ではありませんが、厳密に言うとお母の実家が飯能だったこともあり西武産院生まれのですし、二十年程前からは川寺に住んでいます。第二の人生を歩むにあたり、諸先輩方のご指導ご鞭撻を賜りたいと存じます。どうかよろしくお願ひいたします。

令和六年度 定期総会



令和六年度定期総会が四月二十七日(土)三時に、飯能市総合福祉センターで開催されました。来賓として新井市長、中村教育長、平野校長会長をお迎えし参加者は三十一名でした。令和五年度の事業・決算の報告、令和六年度役員・事業・予算案等が承認されました。その後の賀寿顕彰会では古希三名・傘寿二名・米寿二名の皆様のお祝いが行われました。終了後五年ぶりの懇親会が暖らんを会場にして二十二名の参加により盛大に開催されました。

○会報題字「清脩」について
会報発行にあたって新井清寿先生が揮毫されたものです。昭和五十六年五月十六日発行の第一号から使用されています。

故人を偲んで

石田宣雄先生を偲んで

細田俊雄

石田先生との出会いは昭和五十年四月新設富士見小学校開校の時でした。飯能第一小学校から分離して児童はほとんどが飯能一小から、学区の変更により青木中居地区の精明小の児童がわずかにいるのみでした。

先生は学級担任と教務主任を兼務され学校経営の一翼を担う青年教師として活躍されました。私達若い教師の兄貴分としてよき見本を見せてくださいました。

学校現場二十六年、教育行政十五年の間に残された先生の功績は数え切れません。

昨年三月には退職校長会の研修会の講師を務められ演題は「マイウェイ 私の心が決めたままに明るく楽しく今を最高に生きる」でした。

法然上人の月影の教え生活習慣をつくり運動食事に気をつけることで豊かにする生活を心がけることで人生が変わると、にこやかに語られていた先生が八十歳を目前に急逝され残念でなりません。先生から教えて頂いたことを忘れずにマイウェイを歩んでいきます。

今までお世話になりました。どうぞ安らかに眠りください。

(令和五年十月二日 ご逝去)

橋村充三先生を偲んで

岡村光章

先生との出会いは、昭和六十三年十一月十六日でした。当時の校長先生が入間市教育長に就任され、後任として入間教育事務所より豊岡小学校第二十代校長として着任されました。

着任早々の十一月二十六日に、豊岡小学校開校百周年記念式典を執り行い、更に十二月一日に市教委、市教研委嘱による算数科研究発表会を実施しました。着任後、十六日間で二大行事を、滞りなく成し遂げた先生の指導力が印象に残っています。先生の優しく真面目で誠実な人柄は、多くの教職員から慕われ、和やかな中にも厳しさのある学校経営を実践されました。校長退職後は、入間市立教育研究所長として、研修計画の作成等で入間市教育の充実、発展に力を注がれました。

所長退職後は、早稲田大学で文学の講義を十年以上受講され、芭蕉、西行、定家等を研究し修了証を授与されました。最近は、大好きな読書、俳句、庭の手入れ等でお元気に過ごされていたそうです。「早大の 講義聞きて 若き日思ふ」先生の作品です。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(令和六年四月二十日 ご逝去)

最近の生活から

木を見て森を見ず

平沼 尚

退職後、再任用教諭としてかつて勤務していた中学校で教務主任を拝命し五年目となります。

私の勤務校は雑木林や畑に囲まれた農村地帯にあり「武蔵野は光あまねく揚げひばり」と校歌の一節にもあるように、とても美しい場所に在ります。素直で優しい生徒、協力的な保護者、母校愛にあふれる地域の方々、そして、教育に真摯に取り組む先生方、そんな素晴らしい環境の中で、授業はもちろぬ部活動や生徒指導もこなす充実した毎日を送っています。そんな中、学校現場には「保護者の理不尽な要求」「教職を目指す若者の減少」「教職員のワークバランス」等、様々な課題が山積しています。

また、これらの課題を解決することに教育現場が疲弊していることも事実です。

しかしながら、保護者や地域の方々のほとんどは学校を応援してくれています。

課題を解決する際には「木を見て森を見ず」的な発想にはなりがちではありませんが、「決してそうではない」と言うことを共に働く若い先生方にしっかりと啓発していくことが今の私の使命かと考えています。

「モチベーションアップ」

山下真一

再任用五年目は、入間市立黒須小学校で初任者指導を週二日担当しています。

さて、四月一日に校長室で歴代校長を順に眺めていると、第五代校長浅見勲先生で目が止まりました。浅見先生は加治小学校長等も歴任されていますが、私の詩吟の師匠でもあります。このところ詩吟も（他のことも）中だるみだったので、浅見先生から、「もつと本気でやれ。」と言われているようにも感じ、モチベーションを上げるために、まず詩吟で目標を二つ立てました。

困難度4 十年間続けてきたこと
子供たちに国語の教科書にある俳句や短歌、詩等を解説してから詩吟で聞かせる。詩吟のコンクールに出られるレベルまで高めて。
困難度5 新たなチャレンジ
飯能市エコツアードガイド養成講座を受講し、詩吟入りのガイドをする。例えば、天覧山中段の御駒

繫松では明治天皇の和歌を、多峯主山の常盤平では常盤御前に関わる詩文を・・・

「ここでの詩吟を」との気づきを楽しみながら、新鮮な眼で飯能を歩き回りたいと思います。

年度中の行事報告

地域研修会

令和五年十月二十一日(土)に第十五回地域研修会が飯能市立博物館で開催されました。飯能市市制施行七十周年記念事業として開催されている特別展「原市場秘史―受け継がれる記録と記憶―」の見学と波田尚大学芸員による講演でした。南が原市場になった訳・昭和五十年代に開発された住宅地・展示解説の三本柱でした。

原市場は、縄文時代早期後半には人の痕跡がみられ、江戸時代中期には「西川材」の産地として、大きく発展しています。明治二十二年近代自治体制の町や村としての原市場村は、原市場・下赤工・上赤工・赤沢・唐竹・中藤村上郷・中藤村中郷・中藤村下郷の八つの村が併合して成立しています。

一 南が原市場になった訳

現在の「原市場地区」は大字の前述の八つに加え「南」が入っています。南は元々吾野村でした。その名残が郵便番号に隠されています。大



字原市場は35710123、大字南は35710214。357は飯能市を示し、続く01・02という番号は、それぞれ原市場郵便局・吾野郵便局が集配局だったことを示しています。



併の三か月前の昭和三十一年六月二十七日の「文化新聞」の記事によると、吾野村の八割は東吾野村との合併を望んでいましたが、南の内、中沢は原市場村と共に飯能市に合併することを望んでいました。九月八日の記事では、中沢で区民集会在実施され、吾野村が名栗村との合併を目標とすると発表したことに全戸で反対し、吾野村への分離の申請、飯能市への合併申込を原市場村長と行うことが記載されています。

中沢にあった南小学校を卒業した生徒の内、ほぼ半数は吾野中学校ではなく原市場中学校へ進学していたことが学齢簿に記載されています。南小学校から原市場中学校までの距離は約5km、吾野中学校までは8kmで、原市場村との合併を強く希望する理由の一つの背景でもありました。こうして、南は原市場になったわけですが、その後南の住民は原市場地区に馴染む為に様々な交流の機会を設けています。懇親会の開催、原市場農協への加入、原市場地区として戦没者慰霊祭への参加などです。

二 昭和五十年代に開発された住宅地
昭和四十五年埼玉県は都市計画の最終決定を行いました。旧原市場村地域は都市計画法によって制限がかけられた「市街化区域」「市街化調整区域」ではなく、制限のない「都市計画区域外」となり、大規模な住宅地が造成されました。

唐竹つつじヶ丘は昭和四十八年から唐竹の山を切り開き宅地造成して完成した住宅地です。昭和五十四年の住宅地図には住宅が一軒もなく昭和五十八年に住宅地が形成されています。

中藤杉の木台は昭和五十年頃から山林の造成開発が行われています。昭和五十四年には住宅が建ち始め、昭和五十八年には道路が現在とほぼ同様に完成しています。

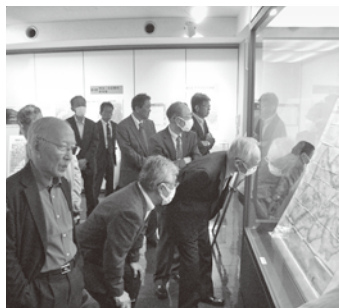
中藤堂西は昭和五十六年市によって開発が承認された住宅地です。昭和五十八年の住宅地図では既に住宅地が形成されています。

これらの開発では、急な人口増加によりインフラが未整備であったり等急激に開発されたことによる課題も生じました。

三 展示解説

受け継がれてきた「記録」と人々の「記憶」をもとに原市場の通史が以下の内容で展示されています。

黎明期の原市場・江戸時代の原市場・原市場村合併



史・近代の原市場村・赤沢の筏師・地図に見る原市場村・中藤中郷の変化・石原の大神楽獅子舞。

原市場には縄文時代の遺跡が十二ヶ所確認されています。縄文時代の早期後半から後期前半にかけて、入間川流域を中心に狩猟・採集の暮らしをし、中期以降は集落をつくっていったようです。横道下遺跡と中郷遺跡では、縄文時代中期中葉の土器は勝坂式、後葉は加曽利E式土器で、両遺跡とも勝坂式最終末期の土器が出土しているのが特色です。

原市場村全体を表した地図で、最も古いものが「高麗郡原市場村略図」です。おそらく原市場村成立と同時期につくられたもので、現在の地図と重ねてみても山や河川位置などはほぼ同じでもとても正確に描かれています。

○参加者の感想から(抜粋)

・縄文時代から現代までの様子が詳しく展示されており、調査した方々の苦勞の跡がしのばれました。
・原市場が最もにぎやかだった大正(昭和初期)の街道沿いの店の絵図を校内に掲げ原市場の歴史を学習したことを思い出します。
・一番は南が原市場に入った理由がわかり勉強になりました。
・三百以上の小字を調べて地図に落とす作業など綿密な調査や作業で作り出された特別展の内容など、説明を受けなければなかなか接することができなかったと思う。
・昭和五十年代に開発された住宅地については教員時代にその歴史を見できたので身につまされました。

相互研修会



第二十七回
相互研修会が
令和六年二月
二十四日常寂
山蓮華院智観
寺において開
催されました。

中藤英岳先生を講師とし「中山家の財宝を拝む」と題して、貴重な宝物殿の見学を含めて講演をいただきました。

一 中山家の解説と宝物殿拝観

まずは宝物殿前で「中山家の宝物」の解説を受けました。用意していただいた資料を見ながら、一つ一つ丁寧に解説していただきました。

智観寺は平安時代の丹治武信の創建です。その加治氏の館跡が当時の面影を残す重要な資料とされている事を熱く語られた解説から始まりました。鎌倉時代の武家の館の見本として東京や千葉の中学校社会科の副読本

に掲載されたほどです。それから次から次と「宝物」が語られていききました。



畠山重忠の乱として知られる二俣川の戦いで討死した加治家季の供養のために建てられた



めた三基の板石塔婆(県指定文化財)。水戸徳川家の付家老として全国の大名の相手をしていた中山信吉の座像。江戸幕府の勘定奉行として財政の中心を担っていた中山信久の刀。日本に三基しかないといわれている、中山信吉木碑の亀趺座。その碑にあるのは、儒学者の林羅山の撰文による信吉の生い立ちが刻まれた貴重な碑文(県指定文化財)。沙羅園の双樹に囲まれた宝台の上に横たわって涅槃に入る釈尊が描かれた涅槃図(県指定文化財)。中山信吉に宛てた伊達政宗の書状。

二 墓所見学

「宝物殿」拝観の後には、智観寺境内を巡りながら解説をしていただきました。

智観寺は、徳川御三家の一つ水戸藩の付家老であった中山信吉を祖とする

する家の菩提寺であり数々の墓があります。付家老は幕府より藩の政治の監督、運営のために付けられた大名格の禄高をもつ家臣です。信吉以降幕末までの藩主の墓が約二百五十年にわたってまとまって存在していました。水戸で没している二人を除く当主とその室、子ども及び分家の墓約四十基がありました。墓標の形態も宝篋印塔や五輪塔や角柱形など様々な物がありました。

中でも大きいのは、墳丘を伴う中山信吉墓(県指定文化財)です。円形でこの規模をもつものは全国的にみても決して多くは無いようです。高さ約3m、裾部の径が15、16mの円形の墳丘の上に高さ3mほどの塔が立っていました。

もう一つ十代信敬夫妻の墓は石垣で築かれた壇の上にあります。水戸藩付家老であった中山家にとつて、主君である水戸徳川家より迎えた信敬及びその室の墓は、石垣で組んだ壇の上に墓石が築かれ、灯籠も備え付けられているなど他とは異なる立派なものとなっています。その他にも、一つのお墓に歴史があり、それを丁寧に説明していただきました。

研修の中で「文化財の保



存は大変。」と話されながら「八十を迎え生きられるだけ生きてみよう」と語られた中藤先生。歴史ある代々の殿様の墓を守っている先生のお言葉として、敬意と感謝を感じた研修会でした。

○参加者の感想から(抜粋)

・ 今回の研修会では、伊達政宗の書状や中山信久公の刀、中山信敬公の画、徳川家光の朱印状等々まさに中山家の財宝を拝む大変良い機会になりました。飯能市と友好都市関係を結ぶ高萩市との今後の友好に思いをはせる事ができました。
・ 近くに住んでいながら知らなかったので貴重な体験でした。
・ お寺の敷地の広いのには驚きました。実踏することが一番です。
・ 住職さんならではの貴重な講話と見学、久しぶりに学びをさせていただきました。
・ 智観寺の文化財管理の大変さがかがわれ、ご苦労されている事に頭が下がりました。
・ 飯能市民としてもとても感慨深く学ばせていただきました。また、中山氏と徳川家の繋がりにについても新たな発見も多く驚くばかりでした。
・ 初めての智観寺。宝物やお墓の説明をお聞きし、徳川、水戸と深い関りがあったということを知り、飯能に歴史に残る方がおり宝物が残っていることを嬉しく思いました。
・ 飯能に素晴らしい歴史の後が残されている事をあらためて強く感じました。もっともっと深く知りたいなと思いました。

文芸

短歌

郷を詠む

浅見 信

蒸し暑き今宵は螢喜々としてわき立ちおらん郷の小川に
坂道を登れば古き郷の家日当たりのよき蚕室残る
雪くれば背戸より杉の雪折れの音の哀しきふるさとと思う

龍崖山

細田 俊雄

山頂に木造乙女待ちをりぬけふも登るは龍崖の嶺
龍崖の頂きめざしけふもゆく木造乙女亡き妻に似て

無事である証に送る定期便スマホ写真に友も納得

早春の出来事

中山 亨

突然の兄の入院に付き添いて処置室の札見ており浅春
サクランボ白き花びら散り初める穏やかな朝ひとり兄逝く
肌寒し主亡き部屋立ち居りてハンガーの服に兄の声聞く

写真

◀「夢をのせて」佐藤信弘



木工芸

▼「木と遊ぶ」浅見敏彦



木版画

◀「一小の中庭」5版6摺

257×190mm 澤田清志



○会員の皆様からの貴重な原稿をいただき、「清脩 第四十四号」を発行することができました。

編集後記

○懸案であった一部カラー化を行いました。部数の見直し等を行いました。博物館と市のシンボルマークで使用されている四色を配色しました。博物館では飯能を支える三つの地域として、里をブルー・町をピンク・山をグリーンで、市では豊かな森林を緑・清らかな川を青で表しています。郷土飯能への願いがこもったこの二つのマークに使われている四色で「会報 清脩」を包み込んでみました。(伊藤 誠 記)